

日経電子版 | 住宅サーチ | キャリア・教育 | オフタイム | 大人のレストラングайд

マーケットアイ

資産査定、「3度目の正直」になるか=ニコラス・ベロン氏(11/1/19)

ニコラス・ベロン氏

ブリュッセル社シニアフェロー



銀行システム危機の解決は常に難しいし、各国が相互依存関係にある欧州ではなおさらだ。2009～10年には政策の行き詰まりで銀行システムが動揺した。さらに、ユーロ圏の一国がマクロ経済に困難をきたすたびに、当該国の財政再建のため、ユーロ圏諸国が一致して支援しなければならなくなっている。

昨年4月、ギリシャが債務問題で身動きがとれなくなった時、直ちにソブリン債務の再編を求めるべきであった。しかし、それによって経営基盤の弱い銀行が破綻するかもしれないことを恐れ、最も危険性の小さい選択肢として「ギリシャ救済」が選択された。アイルランド問題でも同じように全面的な救済が選択された。最大の政策失敗は、平穏な時代にユーロのシステムをもっと復元力の強いものにしておくための行動を取らなかったことだ。

銀行システム危機は決して自律的に解消するものではない。つまり大きな危機の後では、政策金利が低くても留保利益ですべての穴を埋めることはできない。必要なのは政府主導の断固たるトリアージ(損害の程度による救済の優先順位付け)と資本増強、そして銀行セクター再編である。これはS&L(貯蓄金融機関)危機の後、1989～90年の米国、92～93年のスウェーデン、2002～03年の日本、そして09年に再び米国で、ストレステスト(資産査定)という形でなされたアプローチだ。

EUはこれらに匹敵する措置をまだ講じていない。09年9月に全欧州規模で行った第1ラウンドのストレステストは、結果が公表されなかったため、ほとんど注目されなかった。第2ラウンドの結果は昨年7月に公表されたが、信頼回復には至らなかった。そして第3弾が2月に実施されようとしている。欧州委員会のレーン委員は「これまでよりずっと厳しく、包括的なものになる」と述べている。しかし、次回のストレステストを成功させるには、これまでの設計ミスをまず正さなければならない。

第1は、銀行システムにおけるすべての重要金融機関の真の財務状況を、徹底的に、かつ偏らない厳格さをもって再評価することである。昨年7月のストレステストでは、ユーロ加盟各国が一般的に定められた手順を独自のやり方で実施したのが失敗だった。各国をまたぐ中央機関に、各国による評価をダブルチェックさせ、それらが真に比較可能なものであることを保証する権限を与えるべきだ。

第2は資本増強。ぜい弱すぎるものが判明した銀行は新たに資本を調達しなければならない。EU当局は、ソブリン債のデフォルト(債務不履行)の可能性をストレステストに反映させられないだろうから、前回と同様に資本ギャップが過小に評価される可能性がある。この点を補うために、自己資本査定には昨年7月のテストで緩く設定された「Tier1基準」(中核的自己資本)よりも高い基準を課すべきである。

第3は銀行セクターの再編である。09年の米国とは異なり、必要な資本を調達できない銀行が出てくるかもしれない。そうした銀行は強制的に売却されるか、手順を踏んだ解体が必要になる。このプロセスも、公平と効率が求められるので、各国をまたぐ代表機関によって遂行されるべきである。「一国を代表する銀行」とみなされている銀行が外国のライバル行に買収されるなどのことがあるかもしれないし、取引先企業の雇用も壊滅するかもしれない。当然、あらゆる不確実性を織り込んだ対策として新しい法律が必要になろう。

欧州銀行監督当局(EBA)はそうした仕事には不向きかもしれないので、危機解決に専心する一時的な機関を創設したほうがいいかもしれない。また、大規模な公的資金が、法的義務の遂行と危機の波及を防ぐために使われるかもしれない。ただし、これらは我々が再び経験する可能性があるリスクに比べれば、よりましな選択肢であるといえる。